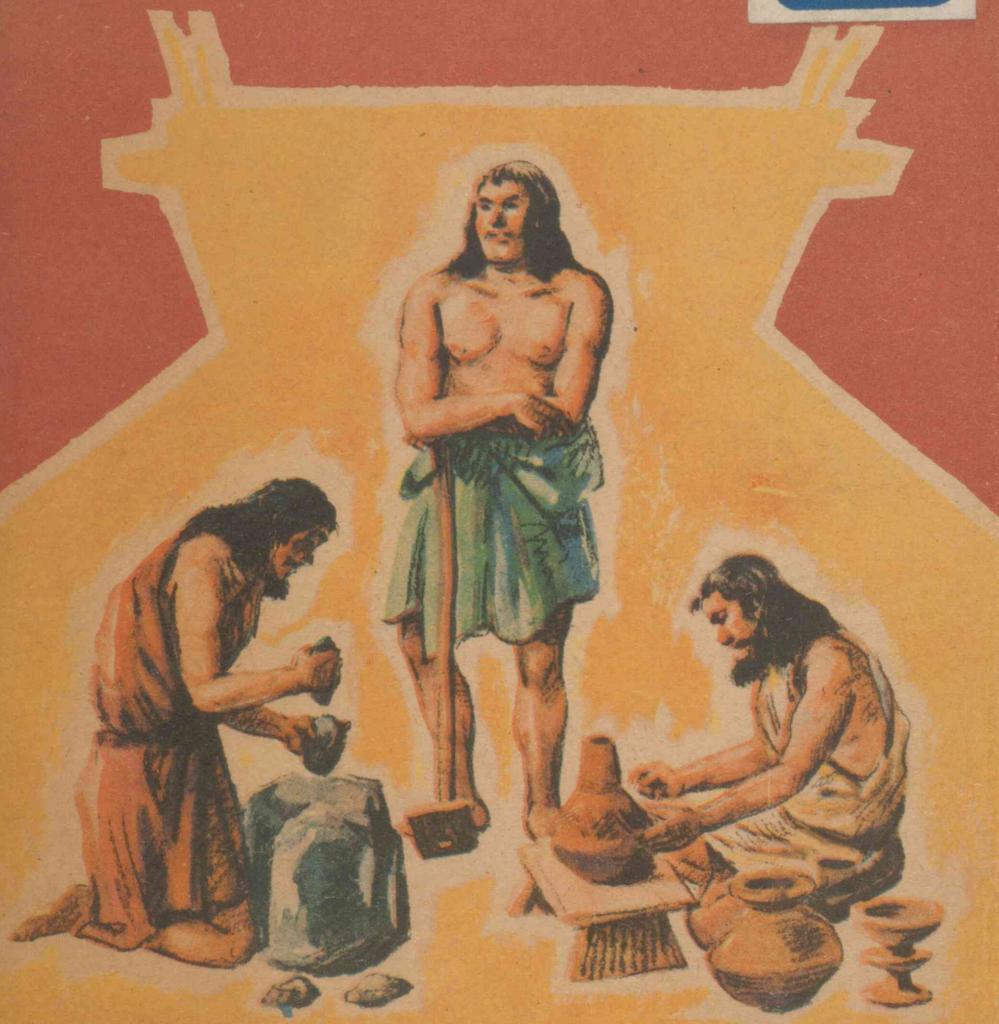


# 大むかしの人々

部  
番  
騰  
三

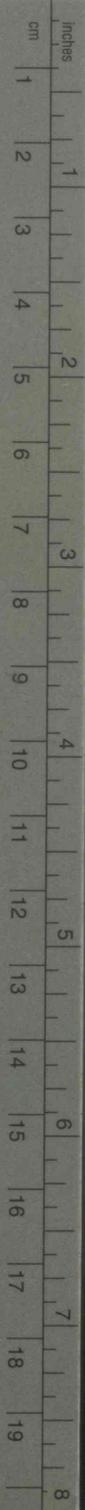
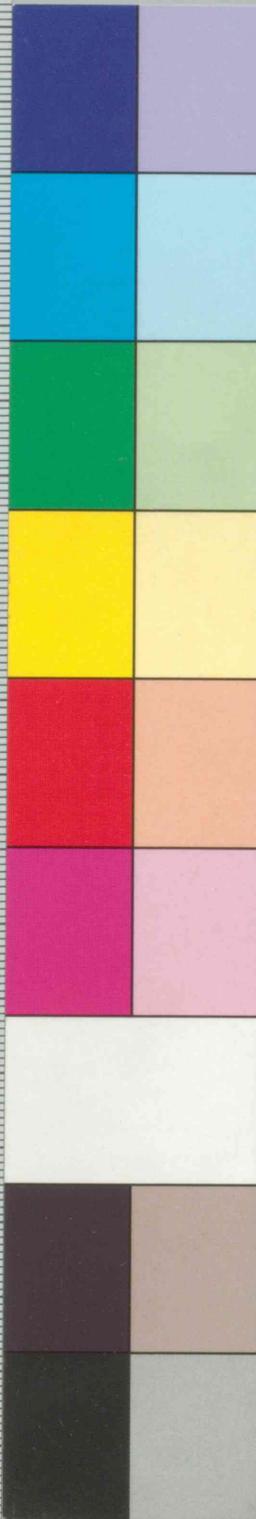
3159  
M014  
資料室



文部省著作教科書



## Kodak Color Control Patches



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

## Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60001

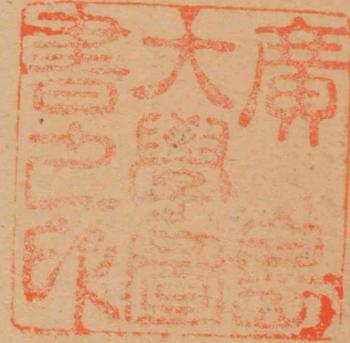
教科書文庫

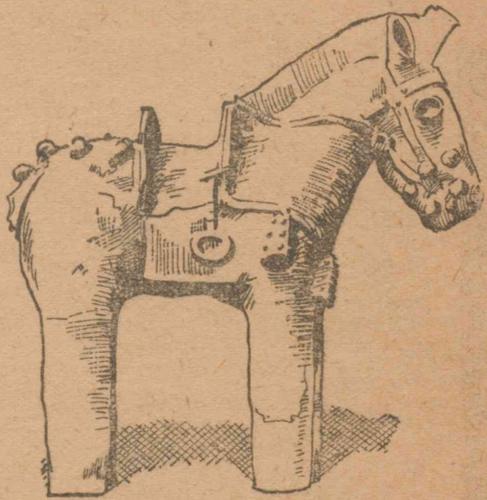
6
300-
34-1949
20000 41378

3759  
M014

資料室

大むかしの人々

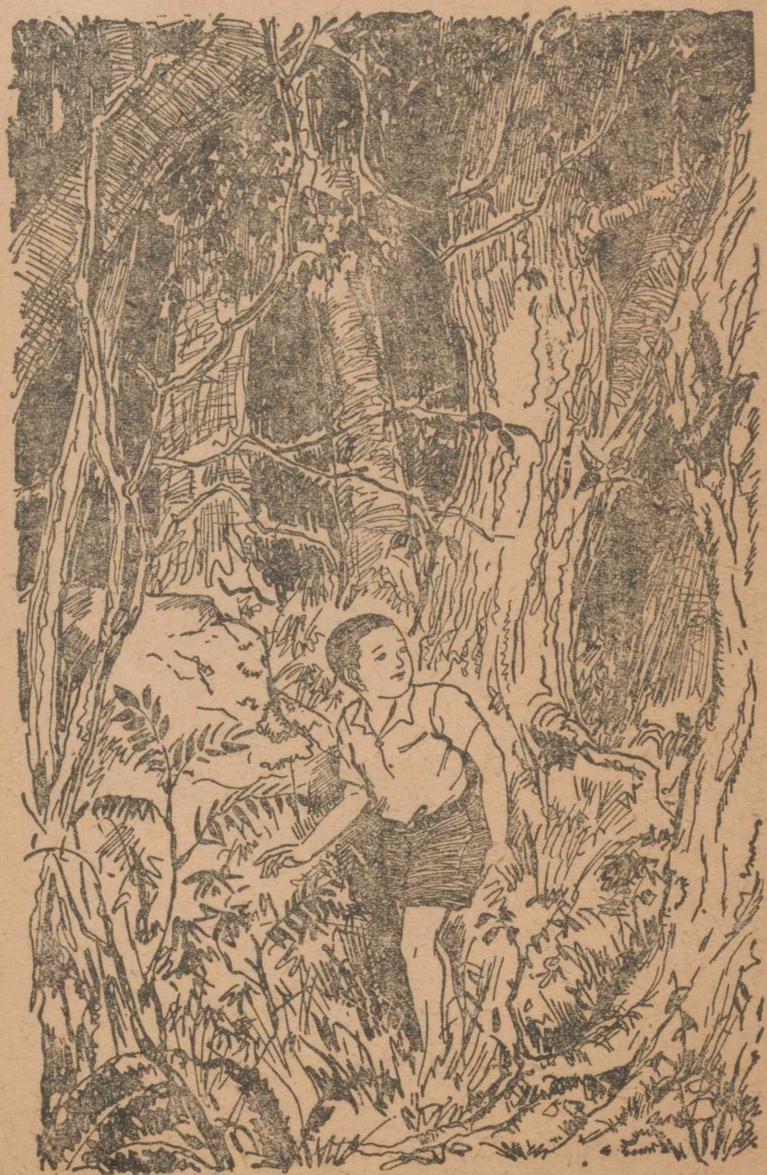




もくじ

- 一、まえがき……………三
  - 二、大むかしの人々……………一四
  - 三、私たちのそせんはどんな生活をしていたか……………六六
- ―日本の大むかしの人々―





ま  
え  
が  
き

森のなかで道にまよった少年

明くんは、森へあそびにいった、とうとう道にまよってしまいました。なん時間もなん時間も、木のあいだをまよいあるきました。どうしても道を見つけないことができませんでした。一けんの家もみつきりません。あっちへ走ったり、こっちへ走ったりして、大きな声でたすけをよびましたが、だれもこたえてくれるものはありません。

しかし、明くんはゆうかな少年でした。なきたくなるのをじつとがまんして、歩きまわりました。おなかですくと、木の



みや草のみをとってたべました。  
のどがかわくと、いずみのふち  
できれいな水をすくってのみま  
した。

森のなかには、手でつかまえることのできる小さな動物もいました。また、明くんひとりでは、とても手におえない大きなこわい動物もみかけました。そんな動物をみると、どうしてみをまもつたらよいだらうかと、考えずにはいられませんでした。

また川では、つりの道具やあみがあつたらとることのできそうな魚も、およいでいるのをみました。

けれども、そのうちに、だんだん太陽がひくくなって、森のなかは、しだいに寒くなってきました。そして明くんは、おうちのこと、あたたかいおへやのこと、おかあさんのつくつてくださったおいしいごちそうのこと、などを思い出しました。

ある大きな木のところへきたとき、明くんはその木に、からだがそっくりはいれるほどの大きなあなのあいているのをみつけました。明くんはそのなかへはいつて、じつとよこになりました。あたりはもううすぐらく、なんの音もきこえてきません。あまり歩きまわったので、すっかりつかれていました。それに、おなかもすいていました。だれがいったい、明くんをさが

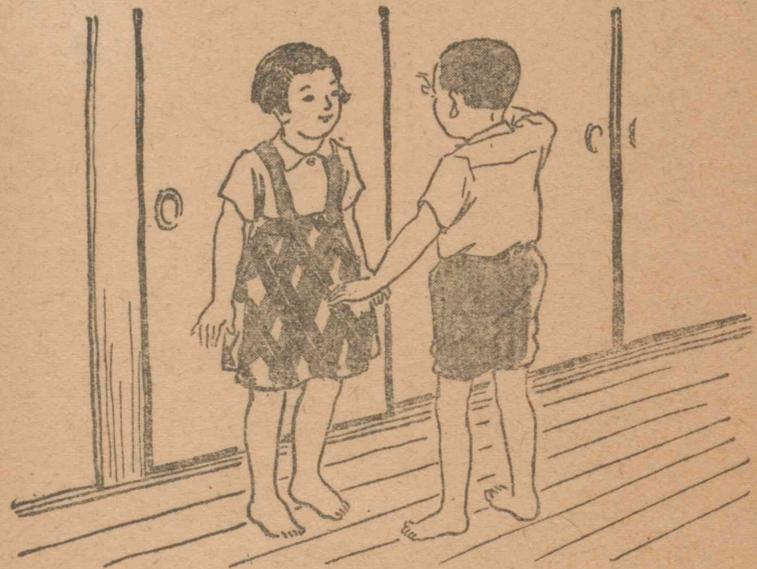
しだしてくれるのでしょうか。  
もし、だれもみつけたしなくてくれ  
なかつたとしたら、明くんはあ  
すから、ひとりて、たべものを  
さがし、ねる場所をつくつて、  
生きていかなければなりません。  
しかし、なん時間かたつたと  
き、そとで大きなさけび声があ  
りました。あかりがうごいている  
のもみえます。みんなが心配し  
てさがしにきてくれたのでした。  
明くんは思わず大声をあげて、



ちちゅうであかりの方へ走りだしました。そして、なつかしい  
お父さんの手に、しっかりとつかまることができたのでした。  
うちに帰って、やっとおちついたとき、明くんは、森のなか  
であつたいろいろのことを、みんなに話しました。すると、お  
とうさんは、一さつの本をだして、「あしたでもよんでごらん。」  
とおっしゃいました。それは、むかしの人々のことをかいた本  
でした。

あくる日、学校から帰って、その本のいちばんはじめにある  
大むかしの人々のお話をよんでいるとき、明くんはこんなこと  
を考えました。

「もし、ぼくが森のなかで、だれにもさがしだされなかつたら、  
きつと大むかしの人々とおなじようにくらさなければならなか



つたんだ。だけど、ぼくは、大  
むかしの人のようにうまくやっ  
ていけたかしら。」

もしあなただだったら、明くん  
のようなめにあつたとき、いつ  
たいどんなことをするでしょう。  
そのとき、ちょうど、みちこ  
さんがあそびにきました。明く  
んは、森のなかで道にまよった  
ことを話しました。すると、み  
ちこさんはいいました。

「私なら、きつと、木を切って

自分の家をつくるわ。そして、動物をつかまえておりょうりす  
るわ。そうそう、それに火をおこしておけば、あたたかいし、  
だれかがきつと火をみつけて、たすけにきてくれると思うわ。」  
明くんはこたえました。

「でも、もしおのがなかつたらどうするの。それに動物は人間  
よりはやいんだから、鉄ぼうやナイフがなかつたら、つかまえ  
ることも、りょうりすることもできない。火をおこそうとして  
も、マツチがなかつたら、だめじゃないか。」

そして、明くんはみちこさんに、大むかしの人々のことをか  
いてあるところをみせながらいいました。

「大むかしの人は、ぼくたちよりも、もつともつとふべんで、  
ひどいくらしをしていたんだ。」



あなたがたは、ロビンソン・クルーソーの話を書いたことがありますか。海のはなれ小島で、ひとりであらしていかねばならなかったクルーソーの生活は、どんなだったでしょうか。

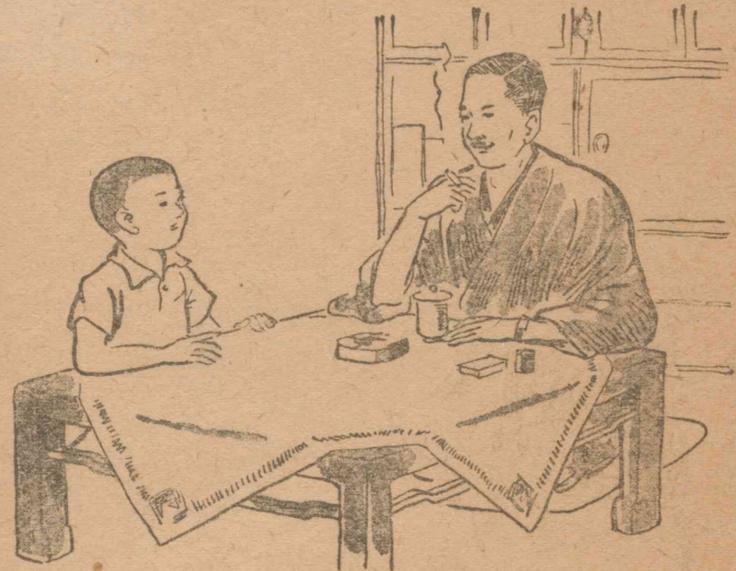
そこでふたりは、大むかしの人々のことについて、いつしうけんめいに考えはじめました。いったい、ふたりはどんなことを考えたのでしようか。つぎに、ふたりの考えたことを、かんとんにかいてみます。

「大むかしの人々は、たいへんふべんなくらしをしていました。そのころには、人々は、家というものをみたことがありませんでした。歩くのにつごうのよい道もありますませんでした。人々はまた、きものもみたこと

がありませんでした。火を使うことも知りませんでした。べんな道具なども、なにひとつそろっていませんでした。そんなありさまでしたから、寒さをふせいだり、たべものを手にいれたりすることでも、たいへんむずかしいことでした。きつと、私たちには考えられないほど、ふべんな生活だったでしょう。」

夕、ごはんのとき、明くんは、おとうさんに、みちこさんとふたりで考えたことをお話ししました。おとうさんはにこにこわらいながら、「よく考えたね。このへやをみて

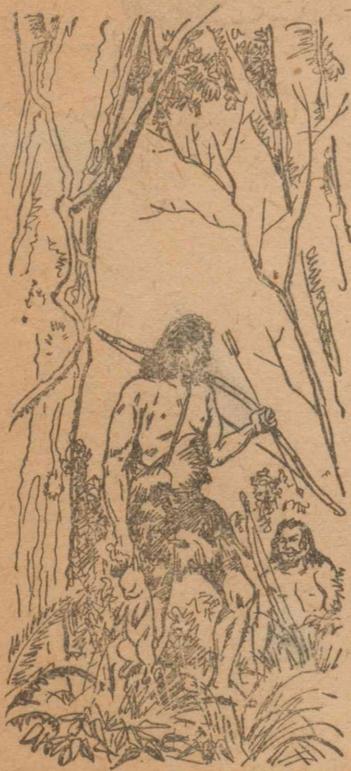




ござらん。私たちはいろんな道具  
 をたくさん使っている。いった  
 いこんな道具をつくることを、  
 だれが考えたのだらう。い  
 すでも、つくえでも、みんなそ  
 うだ。これはみんな、むかしの  
 人たちが考えてくれたものだ。  
 明が考えた大むかしの人々の生  
 活とくらべると、私たちはたい  
 へんべんりな世の中てくらして  
 いる。しかし、こんなべんりな  
 世の中をつくりだしてくれたの

は、いったいどんな人たちの力だっただらうか、明にわかる  
 かい。それは、大むかしから今までの、たくさんのおうぎのす  
 ぐれた人  
 たちの力なんだ。そして、ゆうめいな人ばかりでなく、明がい  
 ちどもなまえをきいたことがない、かぞえきれないほどたくさ  
 んの人たちの力なんだ。

とおっしゃいました。





二、大むかしの人々

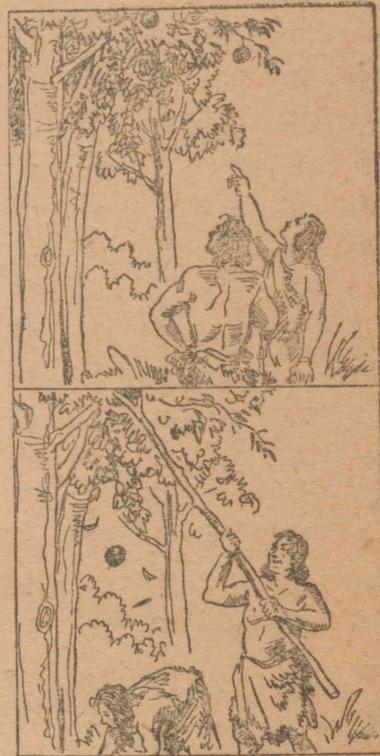
こんにちでは、私たちは、家をたててたのしくくらししていくことも、きものをきて寒さをふせぐことも、そしてまた、道具をつくつてそれをうまく使うことも、よく知っています。しかし、ずっとずっとむかし、大むかしに、この世界に住んでいたいちばん古い人たちは、このようなべんりなくらしかたを、まったく知らなかったのです。人々は、あちらこちらを歩きまわ

りながら、木のみをひろい、さかなをとり、けだものをつかまえて、たべものにしていました。そして、手や、つめや、はななどを、たいせつなぶきにしていました。

しかし、人間がほかの動物とちがうところは、そのうちだいに、道具をつくりだして、それをうまく使うようになったということです。人間がどんなふうにして道具をつくりだしたのかはよくわかりませんが、だいたい、つぎにお話しするようなぐあいではなかったでしょうか。

人間はどんなふうにして、道具をつくるようになったのでしょうか

ある日のことでした。人間のそせんは、たべものをさがして歩いていました。すると、ある大きな森のなかで、おいしそ



な木のみが、高い木の枝にいつぱいみつつているのがみつかりました。しかし、せのびしても、とびあがっても、とても

とどきそうにありません。上のほうは枝がほそいので、のぼっていつても、とちゅうで枝がおれて、おちてしまひそうです。人間は、うらめしそうに、木のみをみあげながら、「ああ、もつと、手が長かつたらなあ。」と、ためいきをつきました。そのころの人間には、こんなことが、きつとなんかいもあつたのだと思います。そのたびに、たべものにこまつた人々は、

「どうすれば、うまくとれるだろうか。」と、くびをかしげて考えこみました。けれどもそのうち、どうとうだれかが、長い木のぼうがころがつているのをみつけて、それをひろいあげ、「ああ、そうだ。このぼうで、あの木のみをたたきおとせば、とれるのではないか。」と考へついたのです。

人々は、このようにして、ぼうを使つて、今までとどかなかつた高い木のみもうまく手にいれることができるようになりました。ですから、ぼうは、人間の使いはじめたいちばんさいしよの道具であり、またぶきでもあつたわけです。

人間は、それからのちも、おなじようにして、ぼうを使うかわりに石をなげて、木のみをおとしたり、けだものをたおしたり、また手のかわりに、かいがらで氷をくみあげたりする、い

ろいろな方法をおぼえていきました。



チンパンジーがあきばこをつみかさねて、バナナをとるところです。

かうまく道具を使うそうです。ためしてみたことがありました。

その人は、チンパンジーのはいっているおりのそとに、バナナをおいておきました。チンパンジーは、おりのなかから手ののばして見ましたが、どうしてもとできません。しかしそのうちに、とうとう、そこにおいてあったぼうきれに気がつくと、

けれども、このくらいの考えは、人間のそせんばかりが、もっていたのではありません。さるのなかまには、チンパンジーとよばれる動物がいて、なかなか西洋のある学者が、このことを

それを使ってかきよせて、うまくとることができたということ。またチンパンジーの手がとどきそうにもない高いところに、たべものをつりさげておいたことがありました。するとチンパンジーは、はじめのうちには、せのびをしたりとびあがりして、とうとうとしました。それでもだめだとわかれると、そこにおいてあった木のあきばこをもってきて、その上に乗ってとろうとしました。しかし、ひとつでは、とどきません。もうひとつかさねましたが、まだとどきません。とうとうみつつみあげて、その上に乗ったというのです。けれども、チンパンジーには、それ以上のことはできません。道具を使うことを知っていても、道具をつくりなおり、もつとよいものにすることはできなかつたのです。また自

分の考えついたこと、發明したことを、しそんにつたえること  
も知らなかつたのです。ですからしそんは、そせんからつたわ  
つたものを、自分のくふうでもつとべんりなものにしていくと  
いうことができませんでした。

石は、いちばん古い時代の人々にとって、ひじょうにたいせ  
つな道具でした。ことに、するどい石のかけらは、つかまえた  
けだものを切りひらく小刀のやくめをしましたし、ぶきとして  
もたいへんべんりでした、しかし、そのような石は、ほしいと  
きにどこにでもみつかるとはかぎっていません。人々は、石の  
多い川原へいつたり、山のなかをかけたまわつたりして、つごう  
のよい石を手にいれようと苦心していました。

ところが、こんなふうにして、道具にするのにつごうのよい



これは大むかしの石でつくられたさま  
ざまの道具です。1.2.8 は石のおの、  
3は石のやり、4は石さじ(石の小刀)  
5.10は石のやじり、6は石のきり、7  
は石のさら、9は石のほうちよう

石をさがしているうちに、人  
人は、いろいろな石には、そ  
のかたちやおもさのちがいに  
よつて、それぞれべつの使い  
みちがあることに気がついて  
きました。そして、そればか  
りでなく、石のかたちを思う

ようにかえることさえ、  
なつてきました。

このようにして、人間のそせんは、道具  
をもつとよいものにつくりなおすことをは  
じめたのです。まずさいしよは、石と石と



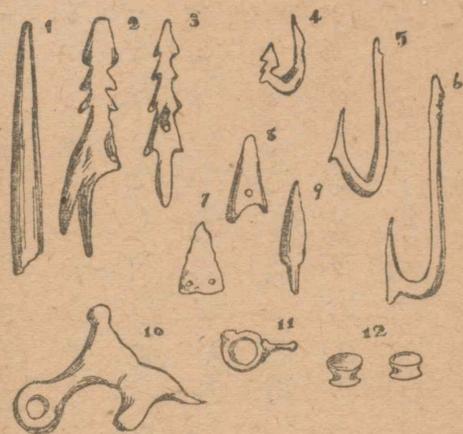
をうちあわせて、自分の思うようなかたちの道具をつくること  
でした。これは、なにかのひょうして、手にもつていた石を下  
におとしたとき、それがほかの石にあたつて、うすくわれるの  
をみて思いついたことかもしれません。また、このように、石  
と石をうちあわせて、思ったかたちにするためには、かたく  
ておもい石を使うとうまくいく、ということもわかつてしまし  
た。

しかし、あなたがたも、きつとおわかりでしょう。石と石と  
をうちあわせて、自分の氣にいった石の道具をつくるというこ  
とは、たいへん時間のかかるくらしいしごとです。けれども、  
このめんどろな、こんきのいるしごとを、人々はいつしうけ  
んめいやりとおし、自分の思うような石の道具をつくつたので

した。よい道具さえ使えば、まえよりも、なんばいもなんばい  
もらくに、しかも早く、木を切つたり、物をけずつたり、つか  
まえただけのもののかわをはいたりすることができます。おしい  
いたべものも、たくさん手にいれることができるようになりま  
す。そう思うと、このことは、時間がかかつてくるしくても、  
がまのできるしごとだつたといえます。

はじめのうちは、つくりかたもへたで、かたちのよいものが  
できませんでしたが、あれこれとくふうをかさね、いつそうべ  
んりな、そしてりつばなものをつくるようになりました。人々  
は、やがて石と石とをこすりあわせると、石のさきがするどく  
なることに氣がつかしました。またおなじようにして、石の道具  
のおもてを、なめらかに、きれいにみがくことも、思いつきま

した。こんなふうにして、はじめのころとくらべれば、たいへんすぐれた道具がつくられるようになってきたのです。ですから、そのころの道具には、ひじょうにこまかな、りっぱなさいくのもののみられます。



はねでつくられた道具です。1 ははり、2.3 はもり、4.5.6 はつりばり、7.8.9 はやじり、10.11 はこしにかざるもの、12はくびかさり。

石おのにあなをあけて、そのなかに木のえをさしこむことは、なかなかほねのおれるしごとですが、このころになると、人々はそれもやれるようになりました。そのほか、かりをするのにべんりな弓矢が発明されてから、えものも

ずつと多くなってきましたが、けだもののほねやつのは、かたいうえにかるいので、道具の材料にするには、たいへんべんりでした。そこで、石の道具をりっぱにつくった人々は、つの道具も、やはりみごとにつくるようになりました。

このようにして、しだいにべんりな道具ができてくると、これまで、手だけではとてもやれなかつたしごとが、かんたんに行えるようになりました。ですから、もうそのころ、道具は、人々の生活にとって、なくてはならないものになっていました。

人間は、どうして火をおこしたか

「人間は火を使う動物である。」といわれています。火を使うことは、人間だけのできることで、ほかの動物には、まったくみられないことです。ですから、火をおこして、それを使うこと

は、人間が大むかしからしどげた発明のうちで、いちばん大きなもののひとつといえるかもしれません。

はじめ、人間は、火をたいへんおそろしいものと考えていました。あなたがたも、ものすごい山火事にあつたようなとき、

はげしい火のいきおいをすぐ目のまえでみたら、思わず、「こわいなあ。」とつぶやくにちがいありません。そのころの人も、かみなりがおちたあとなど、大きな山火事がおこつたときには、こわくてからだがふるえるほどだつたでしょう。

しかし、人間は、山火事のあとに、



やけ死んでたおれていたけだものにくが、なまでたべるより、たいへんおいしいことに気がつきました。また、ふだんはおそろしいけだものも、火をみると、おそれてにげていくというこども知りました。そこで、今までおそろしいと思つていた火は、人々のくらしに、いろいろと役にたつものだということが、だんだんわかつてきたのです。こうなつてくると、これまでおそろしいものと考えていた火を、自分のすまいにもちかえつてみようという、ゆうかな人もあらわれてくるものです。さあ、そのような人の家では、いつたいどんなふうに、くらしのしかたがかわつてきたでしょうか。

火を使いはじめから、人々は、たいそう寒いときでも、あたたかくすごすことができるようになりました。そのうえ、に



アフリカの人々のなかには、この絵のように、むかしのままの方法で、火をおこしているものもあるそうです。

アフリカの人々のなかには、この絵のように、むかしのままの方法で、火をおこしているものもあるそうです。ほのおがでて、木のくずにもえう

ことを知らなかった人々は、こまっつてしまいました。そこで、なんとかして火を自分の力でおこそうと、くふうするようになりました。だれが、はじめて火をおこしたのか、ということはわかりませんが、その方法は、たぶんかわいた木と木とをこすりあわせてみたのだ、と考えられています。

ひよつとすると、人間は、森の木が風にふかれて、こすれあ



あかりが、むかしから今まで、どんなふうにかわってきたか、しらべてごらん下さい。

くも、火にあぶると、おいしくたべられます。夜になつても、すまいのなかはあかるいので、その火をかこんで、しごとをするのができます。このように、火を使うことによつて、人々のくらしは、まえより、ひじょうにべんりになったのでした。

しかし、いったん火がきえてしまうと、火を使うことを知っていても、まだ火をおこす



火をおこすいろいろなやりかたを、上の絵から考えてごらん下さい。私たちは、今どんな方法で火をおこしていますか。

つるようにする、という方法を考えついたのでした。大むかしには、この方法がいちばん多く使われていたようですが、それにしても、たいへん時間のかかる、くるしいしごとだったわけです。今でも、アフリカなどには、こんな方法で火をおこしている人々がいるということです。

こんなわけですから、人々は、いったんおこした火は、けつしてけさないようにと、みんなて心をあわせ、ちゅういしあつていました。まきをすこしずつくべて、晝はもちろんのこと、ひとばんじゆう、火のばんをしていたということです。

しかしそののち、人々は、もつとかんたんに火をおこす方法をみつけました。それは、かたい石と石とをうちあわせたり、鉄と石とをうちあわせたりして、火をおこす方法でした。こと



石のランプを使つて、ほらあなのかべに、絵をかいている  
ヨーロッパの大むかしの人です。ヨーロッパにはこのよう  
な絵のかいてあるほらあながたくさんあります。

もあつたことでしよう。そんなときには、人々はけだものを  
をおいはらつて、自分たちのすまいにしました。  
ほらあなは、ほかのかくれ場所より、寒さをふせぐの  
べんりでした。また夜になつても、おそろしいけだものか  
ら、みをまもるのにつごうがよかつたのです。それで、大  
むかしの人々にとつては、ほらあなは、たいそうよいすま

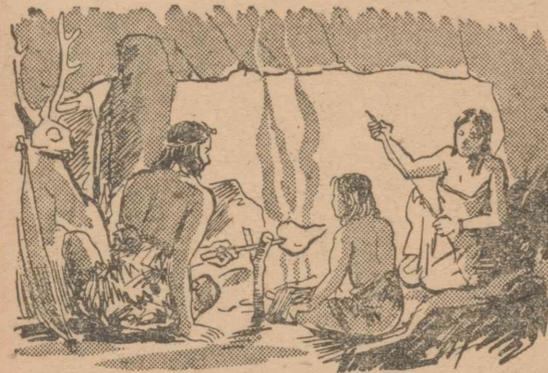
に、鉄と石とをうちあわせる方法は、マツチの発明されるまで、  
長いあいだ使われていたものです。  
いちばんはじめに、人間の住んでいた家  
人間は、さいしよのころ、木の上を、自分のすまいとして、  
ねとまりしていたといわれています。また、大きな岩のかけや、  
大きな木の下や、くぼんだ土地や、やぶのかけなどのような、  
ちよつとしたかくれ場所に、からだをよこにしてねむっていた  
といわれています。

人間のさいしよのすまいは、雨やつゆや風をかんとんにふせ  
げるくらいのそまつなものでした。しかしそのうち、人々は、  
すばらしいすまいをみつけました。それは、ひとりでにできて  
いるほらあなです。そのなかには、けだものがすんでいたもの

いだったのでした。

人々は、夜になると、ほらあなにはいり、入口に石や木の枝などをつみかさねて、おそろしいけだものにみつけれぬようにしました。そのうえ、人間が火を使うようになってからは、

ほらあなのすまいのほうが、火をけさないようにするために、つごうがよいということもあつたのです。



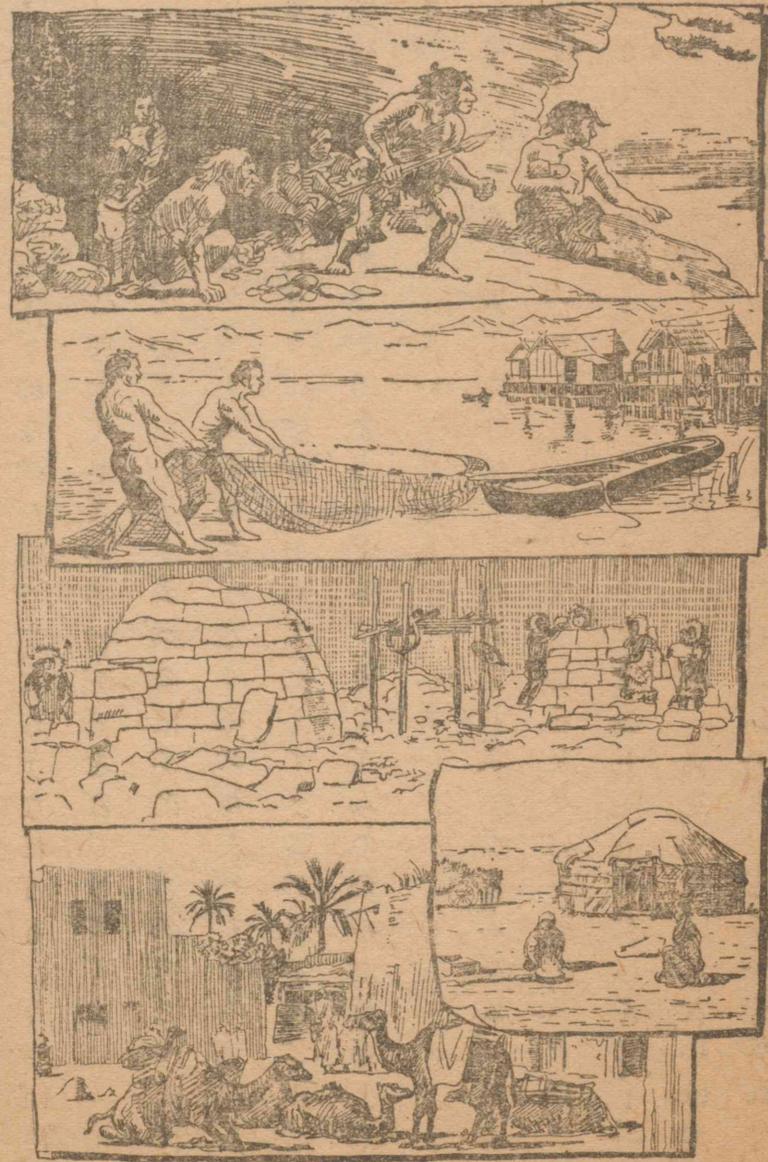
これは、ほらあなのすまいのなかの生活です。おとうさんは、火でなにかやいています。おかあさんは、ぬいものをしてるようです。

このほらあなのすまいには、たいへん大きなものがありました。なかには、長さが三〇〇メートル、はばも、廣ひろいところになると、十

七、ハメートルほどのものがあつたということです。

しかし、ひとりてにできているほらあなは、うすぐらいうえに、じめじめしていて、いごこちのよいものではありません。そこで、人々は、力をあわせて、木や石の道具で、ほらあなのなかのかべをけずり、ゆかをたいらにし、入口のふきんには、火をたくためのあなもほりました。そして、しだいに家らしいかつこうをつくっていきました。

そののちも、人々は、もつと住みよい家をつくらうと、たえずくふうをしていました。そして、あるところでは、人々は、石をつんで、こやをつくり、雨や風をふせぐために、そのうちがわを、ねんどでかためました。また、あるところでは、土地にあなをほり、はしらをたて、やねをふいて、すまいをつくる



ことをはじめるとなつたのです。こうなればもうりっぱに、人間の力でつくつた家だといふことができるでしょう。

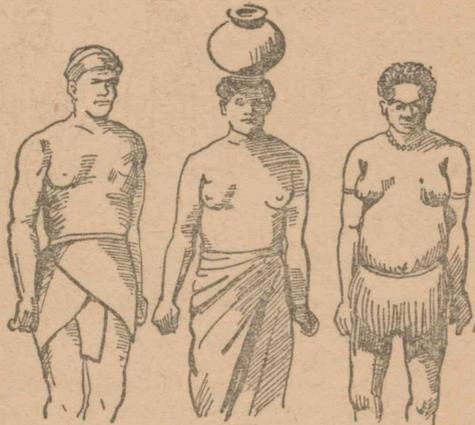
ところが、このようなふつうの家のほかに、この廣い世界には、たいへんかわつたすまいをつくつていた人々もいました。それは、わざわざ、岸に近い水の上に、すまいをつくつて住んでいた人々です。このような家は、みずうみの多い土地によくあつたもので、ヨーロッパの山國スイスなどからも、そのようすまいのあとがみつけたされています。今でも、南洋のあつい地方では、こんなすまいに住んでいる人々がいます。

こういう人々は、どうしてこんな水の上に、わざわざすまいをつくつたのでしよう。それはたぶん、おそろしいてきやけたものが、おそいかるのをふせぐのにつごうがよかつたからだ

と考えられます。

人間はどんなきものをきていたでしょうか

たべものにするために、つかまえてころしたけだもののかわを、いったい人間はどうしまつしたのでしょうか。ほらあなを



大むかし、人々は、このようなきものをきていました。日本でも、大むかしの人は、こんなきものをきたことがあります。あつい地方では、今でもこんなきものをきる人々があります。

すみかとしていた人々は、きつと、ほらあなのすみの方に、つみかさね、夜になると、寒さをふせぐために、それをかぶったり、下にしいたりしてねむったことでしょう。人間のさいしよのきものは、このようなけだもののかわたとい



むかしの人々のうちには、こんなぼうさんのけさのきものもありました。インドではこんなきものをきている人もあります。

われていきます。

それでは、人々はどのようなわけで、毛がわをきはじめたのでしょうか。それは、寒さをふせぐためだったのでしょうか。それとも、

毛がわが美しかったので、それをきておしやれをしてみたかったのでしょうか。それはどちらだったか、よくわかっていません。しかし、だれかがきつと、自分のからだをすっぽりつつむことのできるような、大きな毛がわをほしくなったのでしよう。そして、そのために、



日本の大むかしの人々も、やはりこんなきものをきていたときがありました。

たぶん、はじめは、一まい一まい毛がわにあなをあけ、ほそ長い毛がわや木のかわ、草のくきなどで、むすびあわせてみての  
でしよう。このようなことをくりかえして、人々はしだいに、  
ものをぬうということをおぼえていったのでした。

しかし、あなたがたも知っているように、けだもののなまの  
かわは、かたくてごつごつして、きもちのよくないもので  
す。それで、人々は、いろいろな石の道具やつの道具を使っ  
て、なんかいもなんかいもけずったり、水にひやしたり、ある  
いは、あぶらのようなものをなすつたりして、やわらかくなる  
ようにくふうしました。

こうして、はじめに、かたいなまのかわは、からだにさわつ  
てもきもちのよい、りっぱな毛がわになりました。人々は、は

じめ、このようにして毛がわをきものにしたたり、しきものにし  
たりしていたのでした。

しかし、毛がわは、きものにするには、まだかたくて、よい  
ものとはいえません。それに毛がわは、ほしいときに、いつて  
も手にはいるとはかぎっていません。ことに人々が、かりゆう  
どやりようしのようなくらしをやめて、だんだんひやくしよ  
らしいくらしをはじめると、毛がわは、ますます手  
にいれにくくなります。そこで、人々は、なんとかして、ほか  
のものをきもの材料にしたい、と考えはじめました。

そこで、人々が氣づいたのは、やわらかくてじょうぶな、長  
い草のくきや、木のすじをよりあわせて、それをたてとよこに、  
かわりばんこにくんであむ方法でした。この方法を使つてはじ



大むかしの人々は、こんなふうにして、きものきれや、しきものをつくっていたのでしよう。

めて、人々は、たいへんやわらかいきものをつくりだすことに成功したのです。

このようにして、人々は、それこそ、なん千年もかかって、しだいに、りっぱなきものの材料をみつけ、それで、おりものをつくるようになっていったのでした。

動物をならし、植物をそ

だてることをはじめた人間

はじめ、人間は、かりやりようをしながら、動物をつかまえて、自分たちのたべものとしていましたが、そのうち、こんどは、けだものをころしてしまわず、よくかいならして、いろいろ役にたたせることができるようになりました。

いったいどういうわけで、人々は、けだものをかいならすようになつたのでしうか。

人間は、弓矢のような、かりにはたいへんつごうのよい道具を發明しました。しかし、それでも、かりをすることは、らくなしごとではありませんでした。そのうえ、きせつによって、えものがおおいときど、すくないときどがあります。とりやけだものが、たくさんいるきせつには、えものが、たくさんあつ



これは、エジプトの大むかしの人々が、<sup>ツバネ</sup>水牛にすきをひかせたり、くわを使ったりしているありさまです。

るよりも、こいぬのうちからかいならして、ばんをさせたり、

けどりにして、かっっておくようになりました。  
いちばんさいしょ、人間がかいならしたけ  
だものは、いぬだといわれています。いぬは  
動物のうちでは、こんにちまで、ほんとうに  
長いあいだ、人間にいちばんよくなれた、な  
かのよい友だちでした。いぬもはじめは、に  
くやかわをとるためにかっっていたのでしよ  
うが、そのうち人々は、いぬが、人間のいうこ  
とをたいそうよくきく動物で、かりにつれて  
いけば、ひじょうに役だつということを知つ  
たのです。それで、人々は、にくやかわをと

て、たべきれないほどでした。とりやけだものがすけないき  
せつになると、どうしてもえものが手にはいらず、たべものに  
こまることもよくありました。こんなとき、つかれきつて、お  
なかのすいた人々は、きつと、とりやけだものが、いつても、  
ひとつの場所にたくさんあつまつていればよいのに、と思つて  
くやしがつたことでしょう。

ところがあるとき、たいへんあたまのよいひとりの人が、け  
だものをいけどりにしてきて、自分のすまいの近くに、かこい  
をつくつてやしなつておいたらどうだろう、と思いつきました。  
そうすれば、ほしいときにそれをころして、にくでも、かわで  
も、道具にするつのも、すぐ手にいれることができるわけて  
す。このときから、人々は、けだものをでさるだけたくさんい



エジプトの大むかしの人々が、  
うしのちちをとっているところ  
です。この絵は、古いかべ  
にかいてあったものです。

かりにつれていったりしたほうが、かえつてためになることに  
気づいたのでした。このことはうし、うま、ひつじ、やぎ、ぶた  
などについても、おなじでした。つかまえてすぐころしてしま  
うよりも、えさをたべさせて、そだてたほうが、大きくもなる  
し、かずもふえてくるのがわかったのです。

こうして、人々は、動物をかいならすばかりでなく、そだて  
ることもおぼえました。そのために、どんな  
に入々のくらしがらくになったことでし  
ょうか。これで人々は、かりのときに、えもの  
のすくないことを心配するひつようはなくなっ  
たわけです。

そのうえ、にくやかわが、たべものやきも

のとして役だつばかりでなく、ちちをとることのできるものも  
あるし、人間のかわりに、おもい荷物をはこんでくれるものも  
あります。そこで、人々は、いろいろのけだものを、それぞれ  
の使いみちにしたがつて、いつそう役にたつようにかいならし  
たり、よいしゆるいものにかえたりするようになっていきま  
した。

しかし、どんな土地の人々でも、みんながおなじように、動  
物をかいならすようになつたのではありません。メキシコのむ  
かしの人などは、うしやひつじをならすことを知りませんでし  
た。また、こんにちでも、まだ、私たちがかいならすことので  
きない動物もいます。人々が、はじめに、動物をかいならした  
ときは、こんにちほど、そのしゆるいがたくさんあつたわけ





がして、旅をつづけたのです。今でも、モウコの地方には、このようなくらしをして  
いる人々が住んでいます。

動物をかいそだてることをした人々は、こ  
んどはおなじように、野にはえている植物をそだてることをや  
りました。これまでも、男の人たちが、とりやけたものをさが  
して、野山を歩きまわっているときに、女の人、のいちご・  
くるみ・りんご・なしのような草のみ、木のみをさがして、は  
たらいていたのです。ですから、男の人、女の人、いちに  
ちじゅう、たべものを手にいれるために、いそがしいくらしを  
しなければならなかつたわけです。すこしでもなまめると、た  
ちまち、おなかがすいて、うえじにをしてしまふ心配がありま

す。そこで、人々は、動物をつかまえてきて、それをそだてた  
ように、野にはえた植物を、自分たちで、そだてることをはじ  
めたのでした。

人々は、そのために、おいしいたべもののとれる植物のまわ  
りにはえてあるざつそうをひきぬいて、すくすくとのびそだつ  
ようにしました。また、ひとりのちゆういぶかい人は、とつて



これは、石のくわでたがやしているところ。こんなくわでは、どんなに力があることでも、

きた草のみのたねがこぼれおちたところ、一年たつと、新しいいめがでて、おなじ草のみがはえてくるのを発見しました。小さいたねから、大きなみかとれる。そこで、人々は、たねをまいて、植物をそだてること

をおぼえたのです。

こんにち、私たちのたいせつなたべものをつくってくれる農業（い）というしごと、もとは、このようにして、はじまったものなのです。はじめは、ほんのおぎないぐらいにしかならぬほどのものだったのですが、やりかたをくふうすれば、どしどしたべものが手にはいることがわかったので、あちらこちらで、



農業だけをしごとにする人がでてきました。それに、道具もしいによくなつてきましたから、もう農業は、女の人だけにまかしておけるしごとではなくな



まめ・ひえ・あわ

って、男の人たちが、力をあわせ、それをせんもんにしてやらなければならぬほど、たいせつなしごとになってきました。

### 金ぞくの道具

まえにもお話したように、はじめ、人間は、ほかのけだものとおなじように、長いあいだ、道具を使うことを知らずにいきました。しかし、そのうちに、どうとう石の道具を使うことをおぼえて、それをいろいろつくりかえて、しだいに、べんりな道具をつくりだすようになりました。

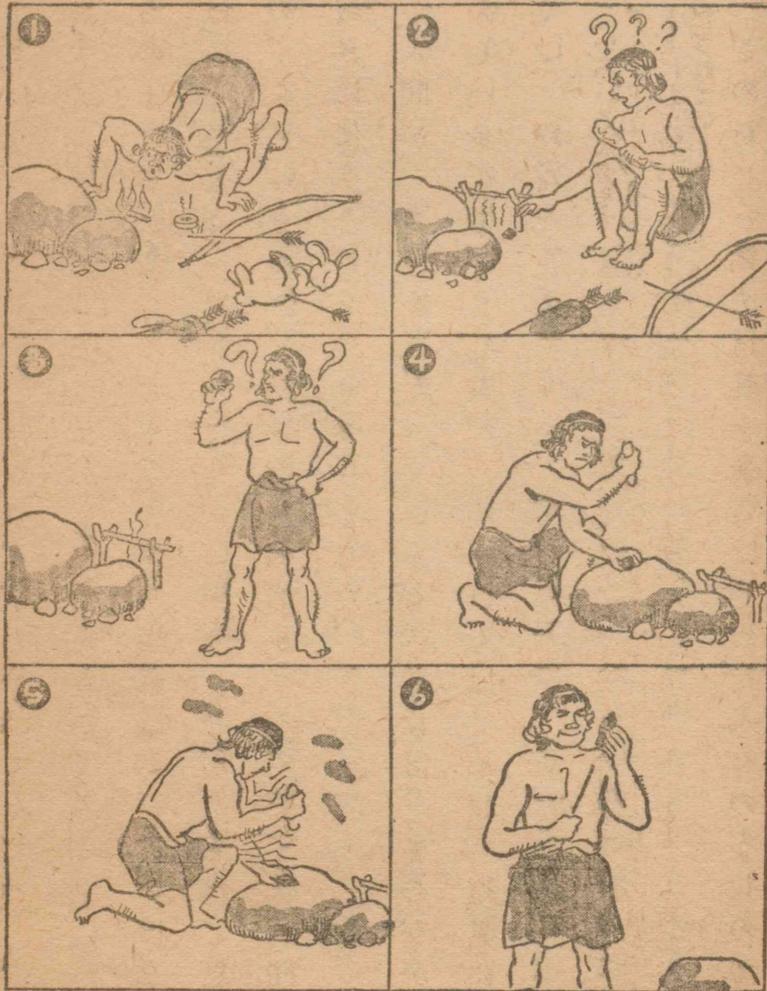
人々のくらしも、それにつれて、だんだんべんりになり、らくに生活していくことができるようになりました。しかし、ここまでいくには、ほんとうに、長い長いとしつきがたっていたのです。そのうえ人間は、それからあとも、なん万年も、なん

万年ものあいだ、石の道具ばかりつくりつづけていきました。そしてやつと、けだものをかい、農業をはじめるところになって、銅銅でこしらえた道具を使うようになったのです。

人間の使っていた石のおのほ、けだもののかたいあたまやほねをうちくどくとき、どうかしたはずみで、ひびがはいってわれてしまうことが、たびたびありました。ですから、人間はいつも、もつとよい道具はないものかと、考えつづけていたにちがひありません。もちろん、つのはねの道具もありましたが、それでは、おもい大きな道具はつくれませんし、だいいち、材料がたくさんはありませんでした。それに、石の道具をつくるのにぐあいのよいかたい石も、長いあいだ、人間が手あたりしだいに使っているうちには、だんだん、みづかりにくくなつて

きたことでしょう。このことは、石の道具や石のぶきにばかりたよつてくらしてゐた人々にとつては、すてておけないたいへんなことでした。道具がなければ、たちまち、まいにちのたべものにもこまつてしまうからです。そういうわけで、人間は、目をさらのようにして、もつとほかに道具にするよい材料はないかと、さがしまわつたのでした。

ところが、あるとき、道具にする石をさがしまわつていたひとりの方が、みなれないめずらしい石をみつけました。みどり色をしたおもい石です。道具にこまつていた人間は、ためしにこれを、かたい石でたたいてみました。ところが、ふしぎなことには、その石はわれないうで、つぶれてひらたくのびていくではありませんか。たたけばたたくほどうすくひろがつて、いたの



これは、大むかしの人が、どんなふうにして金ぞくを使うようになったかということをそうぞうして、絵にかいてみたものです。あなたがたも、ひとつ考えてごらん下さい。

ようになつていくふしぎな石。手でまげてみると、いくらでも思ふようにまがる石。まんなかをたたいてみると、へこんでさらのようなかたちにもなります。「これはいい道具になる。」人間は、きつとこう思つたにちがありません。石だと思つたこのめずらしいものが、銅だつたのです。こうして、人間は、銅を道具に使うことを考えつきました。

人間が、早くから知つていた金ぞくには、あのびかびか光る、美しい金がありました。いちばんはじめに、道具にした金ぞくは、銅だつたのです。

いろいろな金ぞく。今、私たちは、かぞえきれないほどたくさん金ぞくを使つています。きん・ぎん・どう・てつ・すす・ニッケル・あえん・なまり・アルミニウムなどのほか、人々がそれらをもとにして新しくつくりだした金ぞくもあります。これからも、もつともつと新しい金ぞくがつくりだされていくでしょう。

この新しい銅の道具を使いはじめた人々のうちのだれかが、

あるとき、それを火のなかにいれました。それは、ふとしたはずみで、火のなかへおとしたのかもかもしれません。それとも、わざとためしにやってみたのかもしれない。そのとき、あついで、火のなかで、どろどろにとけた銅は、火がきえて、ひえてくる。と、こんどはかたくかたまるということがわかりました。人間は、そのときから、ねんどや石のかたのなかに、とけて、どろどろになつた銅をながしこんで、思うようなかたちをつくることをおぼえたのでした。

しかし、これだけでは、銅の道具は、まだりっぱなものとはいえません。銅でつくつたおのは、かたい石のおのにくらべると、はもまがつたり、つぶれたりしやすく、こまります。銅を使つて、もつとかたい道具ができないものでしょうか。つき

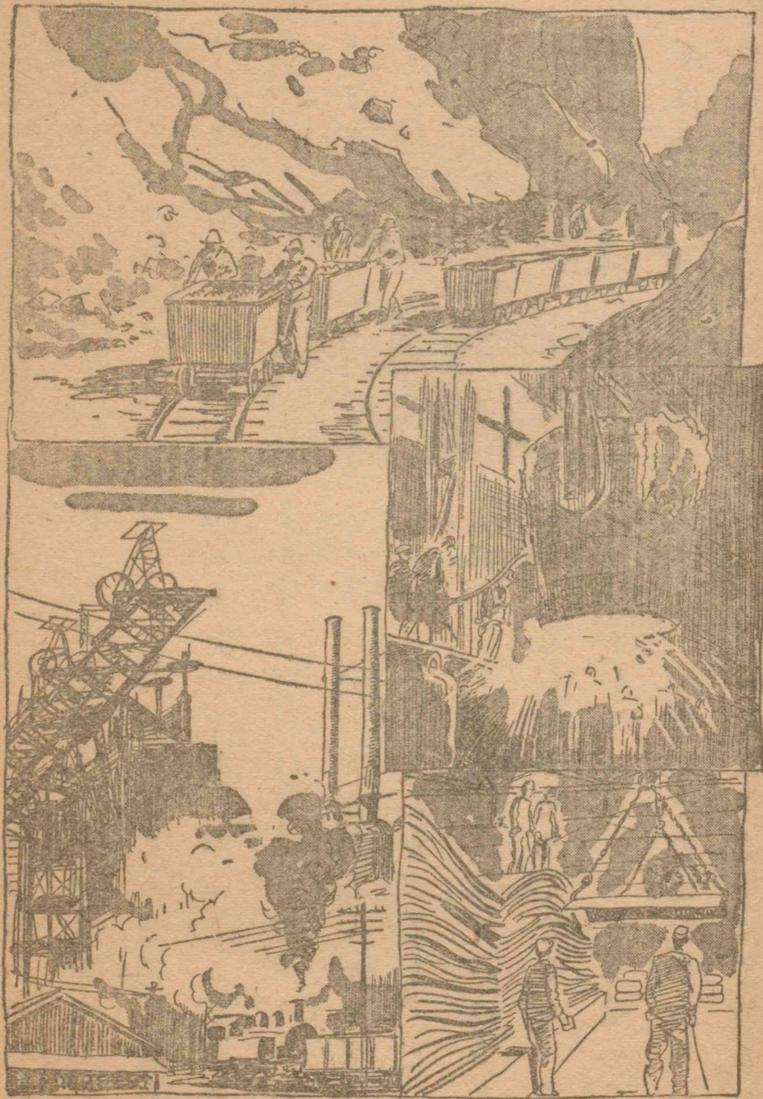
に、人間が考えたのは、このことでした。

人間は、銅といつしよに、よく土のなから、もうひとつべ



これは、ヨーロッパの大むかしの人々が使つていた、めずらしい金ぞくの道具で、いろいろこまかいさいくがしてあります。

つな金ぞくを、みつけたすことがありました。それは、銅よりも、もつと、火にとけやすいくすです。このすずを、銅といつしよに火でとかしてまぜてみると、ふしぎなことに、銅よりも、すずよりも、すつとかたくて、じゆう



これは、今のすすんだ鉱山（炭坑）と、金ぞくをつくるいかに  
るな工場のありさまです。

ぶん道具に使える、新しい金ぞくができてきました。これが  
青銅（せいどう）です。こうして、人間は、いつのまにか青銅をつくること  
をおぼえたのでした。人間は、それから、もう石で道具をつ  
くることをやめて、青銅の道具をつくりはじめました。青銅は、  
ねつをくわえると、やわらかくなり、うつとたいへんかたくな  
ります。ですから、私たちのそせんにとっては、たいへんべん  
りなものだつたにちがいありません。こんな大むかしに、こん  
にちの私たちとおなじような方法で、青銅をつくつていたとい  
うことには、ほんとうに、おどろかされるではありませんか。  
しかし、銅やすずも、どこでも、すぐにみつかるというもの  
ではありません。人間は、それをみつげるために、地めんの下  
までほりかえして、さがしまわらねばなりません。こう



つていなような人々もいます。南洋の島々には、さいきんまで、石の道具を使っていた人々もいました。また、北の寒い地方に住んでいるエスキモー人や、オーストラリアのひらけな地方に住んでいる人々のなかには、ごくちかごろまで石の道具を使つてくらしているものもあります。こういう人たちは、も



エスキモーの人々は、石のなげやりをなげるとき、それを手もとではさんでおく石の道具を使っていました。上の絵のように、この道具をにぎってなげると、やりだけがとんとんでいきます。大むかしの人々は、これに似たものを使っていたのです。

つとべんりなすすんだ道具を、めつたに手にいれることもできないし、また手にいれても、じゆうぶんに役だたせようとしなないからなのでしよう。しかしそれは、けつして人のこ

とだけではありません。私たちも、

そせんから受けついだいろいろなものに、もつともつとくふうをくわえて、つねに新しいすすんだものをつくつていこうとしないならば、いつまでたつても、今以上によい生活をする事はできないと思います。今の世の中は、むかしにくらべれば、たしかにべんりになっていますが、それでも、私たちのまわりには、こまつたことやふべんなことが、たくさんあるのではないでしようか。



三 私たちのそせんはどんな生活をしていたか  
—日本の大むかしの人々—

石の道具を使っていたころの日本  
のそせんのくらし

かりをする人々

私たちのそせんもやはり、はじめは、石の道具を使うことしか知りませんでした。そして、まいにち野山をかけたまわって、木のみや草のみをあつめたり、けだものをとらえたり、



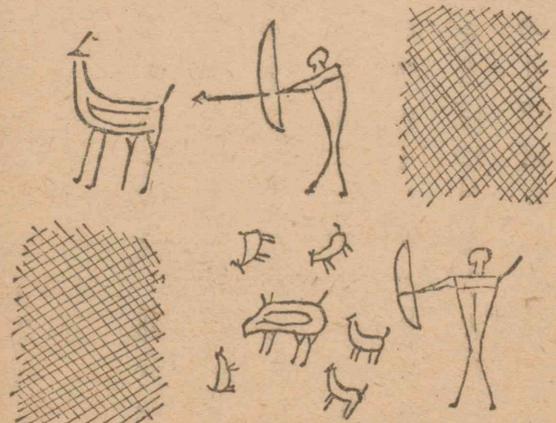
あさい海や川でさかなをとったりして、たべものとしていました。

この絵は、そのころの、森のなかのかりばです。木のおいしげった山のなかを、なんびきかのしかがにげまわっています。むこうの方には、てんてに木のぼうやえだをもち、わあわあとさけび声をあげて、しかをおいたてている人々がみえます。そのよこの方には、おいたてられてにげていくしかにねらいをつけている人々、すきを見ては、やりをなげつけようとまちぶせている人々、などがいます。ひとりのりっぱな老人が、あれこれとさしずをしているようです。

ごらんささい。にげまよった一びきのしかが、だんだん森のすみの方においつめられていきます。よくこえた、大きなしか

です。あつ、とうとう、しかは、あなのようなものなかに、  
ころがりこんでしまいました。おとしあなです。うまくおとし  
あなにおいこんだ人々は、「わあつ。」と、よろこびの声をあげて  
います。

かりがおわりました。小さなえも  
のは、かたにぶらさげ、大きなえも  
のは、木のぼうにさし、みんないき  
おいよく山をくだつていきます。え  
ものが多いので、だれのかおもうれ  
しそうです。家の近くまでくると、  
かりのもようを心配してまつていた  
女や子どもたちもどびだしてきて、



これは、日本のむかしの人々が金ぞくの道具  
にかいたかりの絵です。

穴よろこびをしています。

そのうちに、えものをまんなかにおいて、よろこびのえんか  
いがはじまります。よつてたかつてかわをはぎ、石のおのでは  
ねをたたき切ります。切りとつてやいたにくをほおばり、よろ  
こびのうた声をはりあげて、おどりにむちゆうになるものもあ  
ります。それはそれは、たいへんなさわぎです。みんなが、お  
どりつかれてえんかいがおわると、人々は、なかよくえものを  
わけあい、めいめい自分の家にもちかえります。

### 道具づくり

かりやりようにでかけないとき、人々がしなければならなか  
つたたいせつなほどのひとつは、道具づくりということでし  
た。今のよう、買物にでかけて、なんでもほしい物を買って

くるといふことができなかつたのですから、大むかしの人々は、めいめい自分の家で、ひつような道具をつくつたのです。

そのうえ、まえにもお話ししたように、かりにひつような矢じりややり、それに土をほりおこしたり、だいくしごとに使つたりするおのなど、みんな石でつくらなければなりませんでした。

石の道具 石の道具にはいろいろなものがありました。やり・つるぎ・おの・やじりなどのぶき、ほうちよう・小刀、けものかわをはぐ道具、ぶきと道具をかねた石のぼうなどです。

左手に、けものかわをもつて、そのあいだにかたいうすい石をはさみ、右手にもつたかたいしかのつので、石のまわりをパチパチとうちくだいて、するどいはをつけていきます。石の矢じりは、こんなふうにしてつくつたといふことです。

つりばりやさかなをつくもりなどのりようの道具も、石とお

なじようにかたいたしかのつのでつくられました。つのは、さいくがしやすく、小さいものをつくるのにつごうがよかつたからでしょう。そんなときも、石で、いちいち、つのをけずつて、こしらえたものです。

こんなにはねがおれるしごとを、日本の大むかしの人々は、ずいぶん長いあいだ、やりつづけていたのです。

石や、つもの道具のほか、土の道具もありました。今のせどもののようなものです。ねんどで、はちやかめのようないれもののかたちをつくり、火でやいてかためるのです。

ねんどを火でやくとかたくなるということを知って、そのやりかたで土のうつわをつくることをはじめたのは、どこのだれだかはわかつていません。しかし、日本の大むかしの人々は、

ねんどでわをつくり、それを下からだんだんにつみかさねて、はちやかめをつくることをはじめるといふようになります。

世界のほかの土地では、ねんどをひ



手でこねあわせて、土のうつつわをつくるところです。

いれものをつくっていただけで、それが、そのふかい、大きないれものをつくるには、ふべんです。そこで人々は、

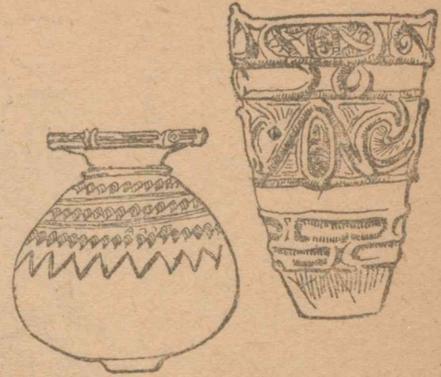


まきあげてつくる土のうつつわ。日本の大むかしの人々は、あまりこんなやりかたはしなかったようです。あなたがたも、ためしにやってみてごらんさい。

このような土のうつつわのつくりかたを、よく知っていました。しかし、それもはじめは、ただ、ねんどを手でこねあわせて、



これは、土のうつつわがどんなふうにしてつくられるようになったかということをもとに、絵にかいてみたものです。

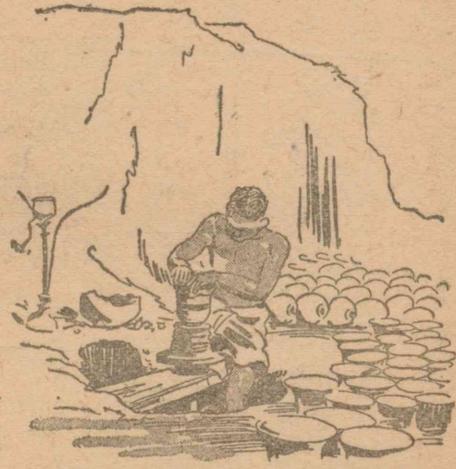


これは、日本のむかしの人々の使っていた土のうつわです。日本の大むかしの人々の使っていた土のうつわには、しゅるいがふたつあります。そのひとつは、うすまきやなわのめのもようのはいたものでした。人々はそのうちに、もようはかんたんでも、つくりかたのすすんだ土のうつわをつくるようになります。さし絵の右のうつわは古いもので、左のうつわは、それよりあたらしいものです。

ものようにひねつて、それをだんだんまきあげて、うつわをつくるというやりかたをしていたところもあります。日本でも、

いなかに行くとき、これによく似たやりかたをして、ただ、手でぐるぐるまきあげるかわりに、下の台をぐるぐるまわしながら、うつわをつくっているのがみられます。

日本の大むかしの人は、このうつわが、たいへんすきでした。石の道具とちがって、自分の思うようになかたちにつくられた。

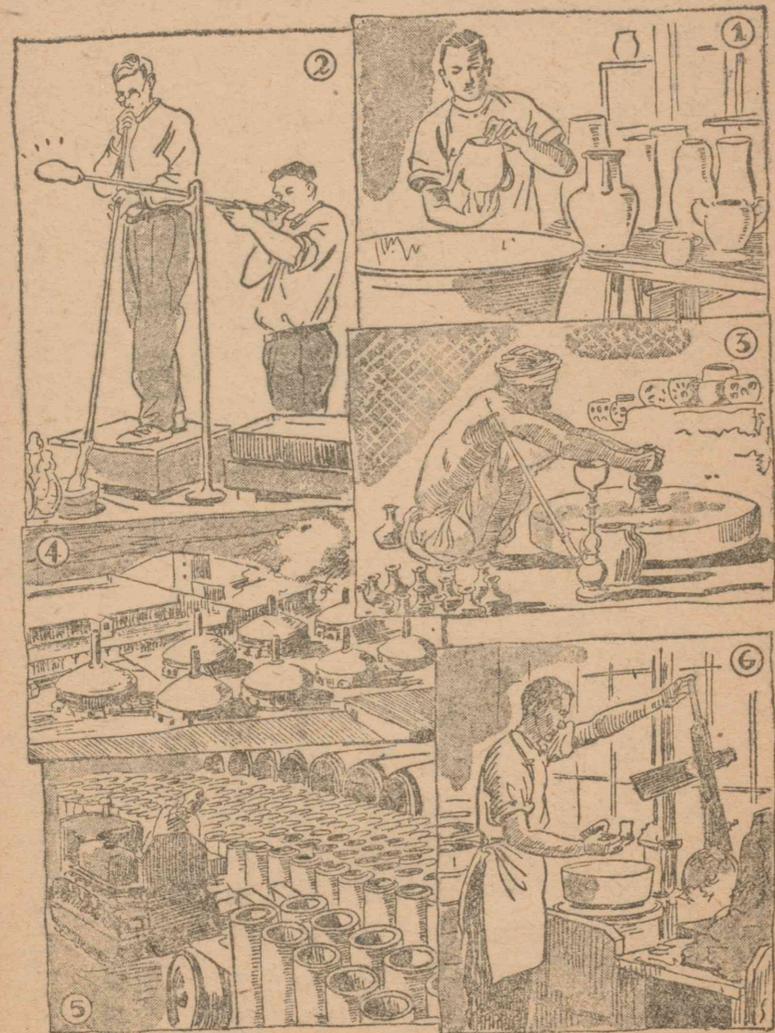


アフリカの人々は、今でもこんなふうにして土のうつわをつくっています。

すし、火でやくまえに、思うように美しいもようをつけることもできます。

人々は、この土のうつわに、かりやりようで手にいれたたべものや、野や山であつめてきたおいしい木のみや、草のみなどをいれておいたり、食事のときにご利用するのに使ったようです。

海からかいをひろってきて、たべものとしていた人々は、それを、自分のすまいの近くにすてました。それが、いつのまに

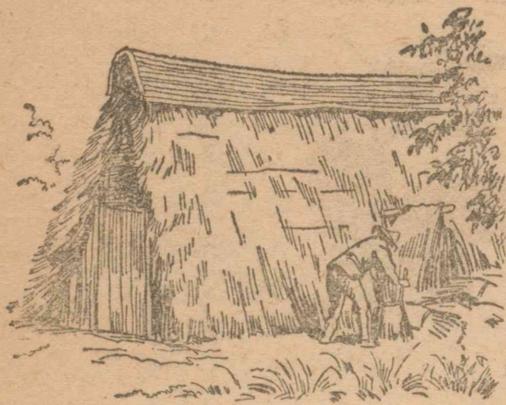


①③⑥は、ねんどでつくられるいろいろなうつわのつくりかた。  
 ②は、ガラスのうつわのつくりかた。④は、れんがをつくる大きなかま。⑤は、どかんをあつめてあるところ。これらは、ねんどや、そのほかの土の材料でつくられるいろいろなうつわです。

かたくさんつもつて、今でもあちらこちらから、かいがらをす  
 てたあとが発見されます。かいつかといわれるのが、これです。  
 このなかから、かいがらといっしよに、土のうつわ、石の道  
 具などがでてきます。かいつかは、大むかしの人々のごみすて  
 ばだったのでしょう。

住んでいた家

あなたがたは、日本の大むかしの人々が、どんな家に住んで  
 いたと思いますか。おいしいことに、そのころの家は、今では、  
 ひとつものこつていません。しかし、石の道具や、土のうつわ  
 などがほりだされた場所や、かいつかの近くには、そのころの  
 人々の住んでいた家のあとが、土のなかにうずまつて発見され  
 ます。そのような家のあとをみて、どんな家だったか、考えて

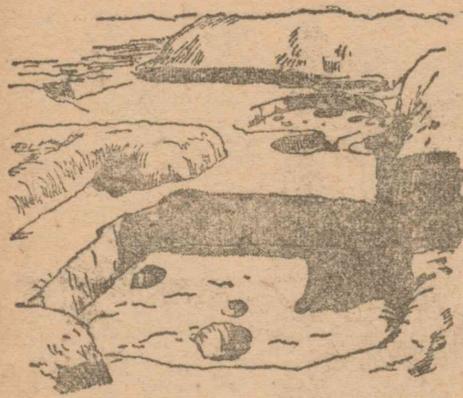


今みられるたてあなの家

日本の大むかしの人々は、はじめ、こんなそまつな「たてあな」の家に住んでいたのです。しかし、土をほってつくる家は、どうしても、しっけが多くて、住みごちちがよくありません。それで人々は、なるべくこたかい丘の

大むかしの人々にとっては、火を手にいれるのが、たいへんむずかしいことでした。地めんにあなをほって、ひくいやねをつけたのは、ただ、雨をふせぐためばかりではありません。風がふきこんでも、火がきえないように、わざと、こんなにやね

の大きな家をつくっていたのだと思われま



たてあなの家のおとです。まるいあなは、はしらのおとです。

そこからはしらがたてられて、やねはそのはしらの上に、木の枝や草などをかぶせてつくり、家のまんなかには、小石をしいてつくった、ろが用意してある。」きつと、こんなぐあいだったのでしよう。



たてあなの家をそろうしてみると、こんなぐあいになります。

みましよう。

「えんの下のない、ちよつとみるとやねばかりでできているような、ひくいそまつなこや、地めんに一メートルほどのふかきのだえん形のたてのあなをほって、



①②は、大むかし、日本の人々がきていたといわれるきものです。しかし、人々は、だんだん③④のようなきものをきるようになったといわれています。それは、そのころの「はにわ」から、そのかたちをそうぞうしてみることができます。⑤⑥は、そのころの「はにわ」とよばれるにんぎょうのようなものです。「はにわ」はむかしの古い大きなおはかのなかなどからほりだされることがあります。

上や山のふもとのように、しっけのすくない土地をえらんで、すまいをつくることにしていました。

かんたんなはたけづくり

まえにお話ししたように、とりやけだものは、よくとれるときど、とれないときどがあります。また、お天気がわるくて、思うようになり、でかけられない日がつづくこともあります。それとおなじように、木のみや草のみも、ほしいときどにいつも手にいれることができ、わけてはありませぬ。ですから、かりやりようだけ、くらしをたてていた人々は、たべものがなくてこまりぬいたこともすくなくなつたことでしよう。

そこで、人々は、しだいに、自分のすまいの近くにかんたんなはたけをつくつて、たべものを手にいれようと、くふうする

ようになりました。家のまわりに、あさく土をほって、たねをまき、水をかけ、ざっそうを引きぬいて、草や木がそたち、みがなるのをまつたのです。

はじめのうちは、ごくかんたんなはたけづくりだったので、女やこどもでも、らくにできるほどのしごとでした。ですから、男たちは、あいかかわらず、かりやりようにでかけていたことでしょう。

しかし、しだいに、人間のかずがふえて、たべものがたりなくなる、こんどは男たちまで、はたけてたべものをつくるようになりました。それは、まえにもお話したように、はたけづくりのしごとがやりやすく、そのうえ、たべものをまぢがいなく手にいれることができると考えたからです。

男たちは、まず、草に火をつけて、野山をやきはらってしまいます。すると、土がやわらかくなり、のこつたはいがこやしになります。そのような土地に、あわや、ひえや、まめなどをまけば、たいへんよくみのります。ところによつては、このよな農業のやりかたをはじめた人々も多かったということです。しかし、そうなつても、人々は、まだまだ、かりやりようのくらしをやめたわけではありません。野山をやきはらつて作物をそだてることも、まだそれだけで人々のくらしがたつていくほど、大きなしごとにはなつていなかつたからです。ところで、かりをしたり、かんたんなはたけづくりをしたりしてくらしている



これは、アメリカに住んでいるインディアンが、むかし、しせんにはえたくもつをかりとつていたときのありさまです。

と、ひとつの場所に、たくさんの人があつまつて、長いあいだ、住みつづけているわけにはいきません。その土地からとれるたべものを、しだいにたべつくしてしまふからです。そこで、人は、あちらこちらにわかれて、ばらばらに住むほうがよいということに気がついてきました。しかし、わかれて住んでみても、たべものにこまってくる、もつとよいところをさがして、うつりあるいていくのがふつうでした。



金ぞくの道具を使うようになって、人々の生活は、どんなふうにかわってきたでしょうか

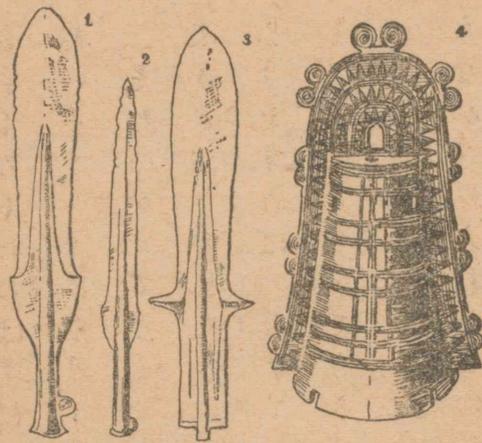
### 金ぞくの道具

日本の大むかしの人々が、長いあいだ、石の道具だけしか知らず、たいへんふべんなくらしをしていたとき、大陸から、新しい金ぞくの道具が、つたわってきました。それは、今から二〇〇〇年ぐらいまえのことだといわれています。

そのころ、大陸の人々はもちろんのこと、遠いヨーロッパの人々も、もうずつとまえから、石のかわりに、金ぞくて道具をつくっていたのです。

石の道具と金ぞくの道具とでは、たいへんなちがいがありま

す。今まで、石のほうでは切りにくくてこまっただけだもの  
かわも、金ぞくのするどいはものを使えば、かんたんに切りと  
ることが出来ます。それに、かねのほうは、かりやりようを



これは、日本のむかしの人の使っていた金ぞくの道具です。1と2は銅のほこ、3は銅のけん。4のつりがねのようなのは銅たくとよばれるものです。

するのにたいせつな、やじり  
やはりをつくるのにも、たい  
へんべんりです。ですから、  
金ぞくの道具を使うようにな  
ると、かりやりようもらくに  
なり、えものが、まえよりも  
とりやすくなつたにちがいがあ  
りません。またはたけしごと  
をするにも、石のくわよりも

金ぞくのくわのほうが、ふかく土地をほりおこすことができ、  
たいそうらくになります。

そればかりでなく、金ぞくの道具は、石の道具とちがって、  
思うとおりのかたちにこしらえることができるので、うまく  
ふうをすれば、今までにない新しい道具も、どしどしつくりだ  
していくことができます。

このようにべんりな金ぞくの道具が、今まで石の道具しか知  
らなかつた大むかしの日本の人々のあいだに、つたわつてきた  
のでした。そして、たちまち、銅や青銅でつくつた道具、それ  
ばかりでなく鉄の道具までが、ほとんどいちどきに使われるよ  
うになりました。

いちど、この新しいべんりな道具が、人々のあいだにつたわ

ると、たべものも、手にはいりやすくなり、したがって、てすうもかからなくなりませす。また、それだけ時間にもゆとりができて、その時間をもつとほかのしごとに使うことができます。こうして新しいべんりな道具を使うことを知った人々は、それを知らない人々よりも、もつとすすんだ、らくなくらしかたをするようになっていったのです。

銅たく 銅たくとよばれる青銅の道具は、いつたいなにに使われたのでしょうか。つりがねをたいらにしたようなものですが、たぶんおまつりするときなどに使った道具だったのだらうといわれています。大陸の人々も、これによくた銅のかねを使っていました。それが、日本につたわったのだといわれています。

### お米づくり

金ぞくの道具が、大陸からつたわってから、はたけづくりもたいへんすすんできました。作物のしゆるいもふえてきました。

そして、その新しい作物のなかに、お米がありました。お米をつくりはじめたから、日本人のくらしは、たいそうかわつてくるのです。

今では、日本じゅうどここの土地にいつても、農家の人々は、たいていお米づくりを、おもなしごとに行っています。このお米づくりは、もともと、南のあつい地方ではじまったものだといわれています。それが、大陸につたわり、そこから、日本につたわってきたのでした。

新しい金ぞくの道具をもつてきた人々は、このお米のつくricatを、人々におしえました。それまで、かんとんはたけをつくつて、あわ・むぎ・まめなどがとれるのをたのしみにしていた人々は、こうして、田をつくり水をひいて、いねをそだて、



大むかしのお米をついているところの絵は、銅たぐにかいてあったものです。

お米をつくる新しい農業をはじめようになつたのです。

しかし、水田をつくるには、水をためておくいけ、水をひきいれるみぞなどをほるといふ大しごとをやらなくてはなりません。ですから、たくさんの人々が、力をあわせてやらなければ、りっぱな田はつくれなかつたわけです。それに、田をつくるには、べんりな道具がひつようだったので、こんなとき、金どくの道具は、たいへん役にたつたのでした。人々は、ひとつの土地に住みつかなければならなくなった。

お米づくりをはじめた人々は、まもなく、もうまえのように、たべものをさがして、歩きまわることができないことに気がつ

きました。もし、田うえをしたただけで、ほうつておいて、ほかの土地にたべものをさがしにいったとしたら、どんなことがおこるでしょう。けだものが、田をあらしにくるかもしれない。また、ほかの人がやってきて、いつのまにかみのつたお米をとっていつてしまふかもしれない。それに、手いれをしないと、せっかく、苦心しいねをうえても、よくみのらないでしょう。ですから、それをふ

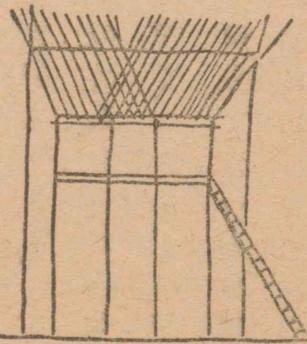


人々はひとつの土地に住みついて、はたけしごとをはじめます。

せぐためには、田の近くにすまいをつくって、田うえから、お米がみのるまで、こしをおちつけて、せわをしなければならぬになります。

人々は、このようにして、あちらこちらうつりあるくくらしをやめて、ひとつの土地に住みつくようになっていきました。水田をつくるには、水をひくのにつごうのよい土地がべんりです。それで、人々は、川ぞいの土地にうつり住むようになりました。しかし、あまり川ぞいのひくい土地では、大雨のときなど、よくこうずいがおこって、田もすまいも水びたしになつてしまいます。それで、はじめは、川ぞいの土地でも、こうずいなどにおそわれるきけんのすくない場所に、田やすまいをつくったのでした。

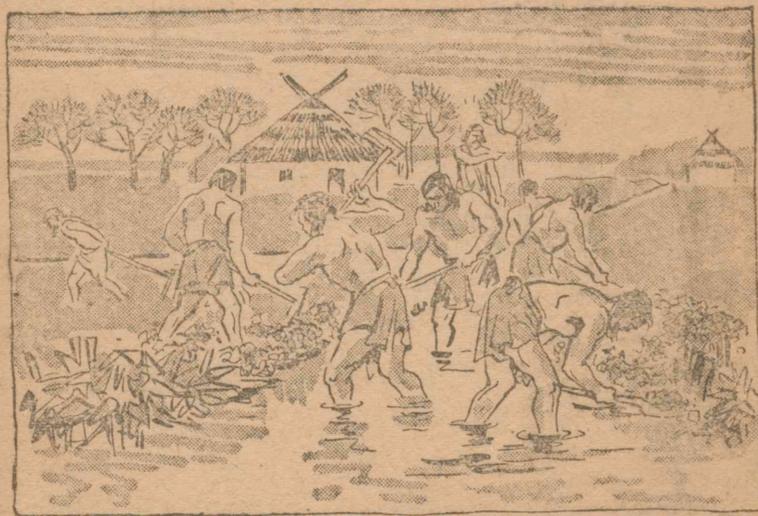
そのうち、お米づくりも、だんだんうまくなつてくると、一年じゆうたべるだけの米がとれるようになります。そこで、それをしまつておくくらが、あちらこちらにつなれました。そのくらは、たいせつなたべものをいれておくのですから、しつけが多いと、ものがくさりやすくこまります。そのため、人々は、高いゆかをつくらつてくるようになりしました。



これは、銅たぐにかかれています。高いゆかのあるくらの絵です。

### 村ができる

お米づくりの農業をはじめた人々は、川ぞいの、水をひくのべんりな土地にうつつて住みはじめました。しかし、人々は、



これは、大むかしの人々が、田に水をびくみぞをつくっているところ  
です。

ここで、いろいろなむずかしいもんだいにぶつかりました。川ぞいの土地でも、長いあいだ、すこしも雨が降らないときには、水ぶそくてこまるころがあります。また、そのはんたいに、大雨が降つて、こうずいがおこり、田もすまいも水びたしになつてしまふこともあります。

そこで人々は、水ぶそくのときの用意に、ためいけをつくることをはじめました。しかし、ためいけをつくつただけではまだたりません。ためいけや川から、どうして、自分の田へ水をもつてくればよいのでしょうか。いちいち、水がめで水をくんでこんでくるのでは、てすうがかかつてたまりません。それで人々は、みぞをつくつて、ためいけや川から、自分の田へ水をひくことをはじめました。そして、それとともに、こうずいをふせぐため、川にていぼうをつくることをはじめました。

しかし、こういう大きなしごとは、とてもひとりやふたりの力でできるものではありません。たくさんの人々が力をあわせてしごどをすることが、どうしてもひつようです。また、かしらになつて、けいかくをたて、さしずをする人がなくては、し



大むかしの日本の村のありさまを、こんなふうにもうごうして  
みることもできるでしょう。

ごどがはかどりません。  
こうして、お米つく  
りの農業がさかんにな  
るにつれて、しだいに  
たくさんの人のあつま  
りができるようになって  
いきました。そして、  
あちらこちらに、ぶら  
くのようなものができ  
あがりました。村は、  
このようにしてはじま  
ったのです。

村ができれば、そのうちに、村の人々をさしずするかしらも  
きまります。こうして、人々は、ひとつの場所にたくさんの人  
人があつまつて、力をあわせてくらしていくことをおぼえたの  
です。人々は、ひとりの人の力ではできないことでも、たすけ  
あつてやりとげることができました。村には、たくさんの人々  
がいるので、みぞをつくつたり、ためいけをつくつたり、てい  
ぼうをきずいたりするような大きなしごとをするのにも、たい  
へんべんりだったのです。そのおかげで、お米づくりもらくに  
なり、作物のしゅうかくも、ずいぶんふえていきました。

それでも、はじめはまだ、ぶらくをつくつて、いっしょに生  
活するということを知らなかった人々もあつたでしょう。しか  
し、てきにせめられたときなど、ぶらくをつくつていけるほうが

心づよいので、だんだんぶらくなかまいりしました。また、ぶらくとぶらくとがいつしよになつて、大きなぶらくがてきるようにもなつていきました。

このように、お米をつくりはじめるようになってから、世の中は、むかしとすつかりかわつてきました。人々は、今までとはちがつて、ひとつの土地に住みついて、助けあつてくらすようになりました。

しかし、ぶらくをつくつて生活していると、ほかのぶらくがらせめられることもありますし、ぶらくの人々のうちで、あらそいのおこることもあります。そのようなときに、人々のさしずをしててきをふせいだり、あらそいをおさめたりするのが、村のかしらのやくめでした。ですから、かしらになる人は、村

の人々のなかでも、たいてい年とつた、ちえのある人がえらばれたのです。

そのうちに、ぶらくがしたいに大きくなると、かしらのしごともたいへんいそがしくなつてきます。しかし、それとともに、かしらのいうことをきく人のかずも、どんどんふえてきます。そこで、大きなぶらくのかしらは、たくさんの人たちから、たいそううやまわれるようになっていきました。



## 教師のかたがたへ

社会科学習指導要領補説には、第三学年の主要経験領域が「地域社会の生活〔大昔の生活と比較して〕」と示されている。この期の児童は、全く文明のひらけない不自由な時代の人々の生活に、しばしば興味を示すものであることは、われわれの多く経験するところである。

この「大むかしの人々」は、人類や日本の文明のひらけない大昔の未開の生活およびわれわれの祖先の生活に取材して、現在の人間生活・社会生活に対する目をひらき、これについて知識や理解を廣め、かつ深めることを、その主要なねらいとしているが、あわせて、できる限り必要な資料をも提供しようとした。

しかし、ここにおさめられたものは、その意味からいっても、決して十分なものとはいえないかもしれない。故に教師は、実際にあたっては、できる限り、さし絵その他の内容をおぎなつて、指導に役立たせていただきたい。

またこの本の内容は、四年用として配本される「日本のむかしと今」を読むために必要な理解や知識をあたえるのにもきわめて役立つものが多い。したがつて、その意味で、「日本のむかしと今」の序説をなすということもできる。ただ、前述のように、この本の内容が、第三学年の児童の興味に適應し、したがつて役立つものが多いと考えられるため、三年にも用いることにしたのである。

その意味で、この二つの本は、三年・四年を問わず、児童の理解の程度に應じて、適宜に融通して、使用するように配慮していただければ幸いである。

社会科 小学校第三学年用

大むかしの人々

Approved by Ministry of Education

(Date Sep. 6, 1949)

昭和二十三年十月三十日翻刻発行  
昭和二十四年十月二十日修正印刷  
昭和二十四年十二月十五日修正発行  
(昭和二十四年十月十五日文部省検査済)

定価金拾毫円四拾銭

著 者 文 部 省

発 行 者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式会社  
代表者 長 得 一

印 刷 者 東京都台東区二長町一番地  
凸版印刷株式会社  
代表者 山田三郎太

発 行 所 東京書籍株式会社

